

會報



第四年七月号

昭和八年十一月五日發行

通卷第三十一号

一大檜沢下降水、廣河原小屋（三、三〇）、以下時計紛失記録の正確を欠く。

十九日 廣河原小屋—白鳳峠—高嶺—地藏岳—鳳凰小屋（北御室の上流十町余のところ）

二十日 凤凰小屋—觀音岳—塞ノ河原—北御室—青木湯—斐崎

◎上高地ベースキャンプ日誌

七月十四日 十二時松本より到着直ちにテントを玄文沢に張る。小梨平も流石に未だ静かである。三時半タ立あり、テントに入りし者鷺野、望月、杉浦、鷺崎、郡司、堀岡（以上部員）遠藤、村田の八名、

七月十五日 雨、脊藤（部員外）を迎えた堀岡鷺野、杉浦、大正池まで行く。夕飯の支度中凄い雨に会ひ中途にしてテントに逃げ込み、コツヘルで変な飯を作る。食後突然村尾先輩の来訪あり近藤先輩からの羊羹に一同元気付く。

七月十六日 終日雨、午後村尾先輩一行の来訪あり、食糧の補給に一同喜ぶ。雨中専門部一組、豫科一組来るもテントに入らず。

七月十七日 曇時々晴、望月、遠藤、鷺崎、村田、郡司班午前八時槍へ向って出発・堀岡、脊藤

十四日 小屋（五、〇〇）—七丈小屋（六、〇〇）—駒頭上（八、〇〇）—八四〇—仙水峠（一、〇、三〇）—北沢小屋（一一、四、一、〇〇）—北沢峠—七丈小屋（四、三〇）

十五日、十六日 天候悪く仙丈滞在
十七日 仙丈小屋（五、三〇）—頂上（六、〇〇）—路ノ平（七、四五）—高望池（八、四〇）—野呂川越（一、一〇）—三国岳（二、〇〇）—間ノ岳（三、三〇）—北岳小屋（六、〇〇）
十八日 小屋（六、三〇）—北岳（八、〇〇）—北岳（八、〇〇）

第 四 年 第 七 号

杉浦、鷺野の班は松本からの大野を大正池に迎え先発隊の後を追つて十一時上高地を立ち槍へ向ふ。小舎より奥徳ジヤンダルムを経て天狗沢を下り四時歸る。阿部（部員外）来る。

七月二十日 晴、遠藤独り焼へ、他はノビル。

七月二十一日 晴、午后四時夕立、堀岡、鷺野、杉浦、齊藤、望月、遠藤霞沢左俣へ、大野、阿部、郡司、鷺崎、村田焼へ。

七月二十二日 晴夕立、鷺崎、郡司、村田、遠藤徳本峠を経て帰京、齊藤大正池より自動車にて松本へ、久し振りにて清水屋にて飯らしきもの存分に食ふ、就中大野、鷺野、堀岡大食なり。

七月二十三日 晴、堀岡、杉浦、鷺野岳川をつめて奥徳へ。望月足を痛めて休養、宮川徳沢へ散歩。十合中島南を終えて、燕常念を経て来る。

七月二十四日 晴夕立、鷺野南へ入る帰る。

七月二十五日 晴夕立、十合宮川安房峠を経て平湯へ。中島鰐を一匹釣り大騒ぎ。

七月二十六日 大雨、土方武田（部員外）テントに入る。

七月二十七日 雨後晴、望月徳沢へ。

七月二十八日 晴時々曇、望月徳沢へ、中島阿

部大野三名堀岡杉浦に送られて徳本峠を経て帰京の途に着く。土方武田焼へ、夜平野室谷へ部員外（テントに入る）。

七月二十九日 晴、堀岡杉浦后五時帰る。土方武田帰る。

七月三十日 晴夕立、堀岡杉浦后五時帰る。望月井上氏等と共に同時割帰幕。

八月一日 晴

八月二日 曇 三週間の長きに亘つて安らげき懇ひの場所を與へて呉れたテントも遂に疊まれて又来る日まで清水屋に預けられる。后三時堀岡杉浦望月淋しく上高地を引上げる。

◎槍、徳高縱走、

A班 堀岡、齊藤、鷺野、大野、杉浦

B班 望月、遠藤、郡司、鷺崎、村田

七月十七日 晴時々曇、玄文沢テント（ハサウエー吉城屋）

一牧場（一〇、一〇）一横尾谷出合（二、三〇、一一、一〇）一大槍（四、四〇、一五、二〇）一殺生（六、〇、一、一有（七、〇））

A班は大野の上高地に来たるを待ち、B班の出発後十一時半上高地を発し七、三〇頃肩にいたる。

十八日 晴霧、小槍登攀 村尾氏（先輩）、堀岡、杉浦、鷺野、望月、人夫、杉本萬四郎

第 四 年 第 七 号

肩の小屋へ七、三。) — ザツテルへ八。) — 頂上へ五。) — 肩の小屋へ二。)

肩の小屋發へ二、三。) — 南岳 — 大切戸へ三、三。) — ジヤン
四。) — 北穂高へ五。) — 唐沢岳へ七。) — 穂高小屋へ四、五。) — 穂高
小屋へ八。)

燕岳から来た宮川、佐々木の二人が加り十二名
の多数にのぼつた穂高縦走は思はぬ時間を消費
した。

十九日 曇、晴、穂高小屋へ八。) — 奥穂高
(八、四。) — 奥穂高と前穂高の最低鞍部
(一、三。) — 前穂高へ二。) — 一、四。) — 水ノミ
沢(ニ。) — 河童橋(四。) — テント(四、三。)

◎ 露澤の三本槍 堀岡、齊藤、杉浦、
鷹野、遠藤、望月。

七月二十一日 晴タ立 玄文沢テント發へ八、五。

右俣、左俣の分岐点へ九、三。) — 左俣に入る — 第
一の二俣へ二。) — 第二の二俣へ二、一五。) — 二。)
一三本槍の最左ピトクの頂上へ一、五。) — 二。) — 徒
路を下る — 岩小屋らしき点へ三、五。) — 五。) — 此間タ
立の止むのを待つ — テント帰着へ五、三。)

◎ 唐沢池の平 望月 他三名

七月二十八日 晴 玄文沢テントへ九、一。) — 牧
場へ一、一。) — 二。) — 横尾谷出合へ二。) — 池

肩の小屋へ七、三。) — ザツテルへ八。) — 頂上へ八。

肩の小屋發へ二、三。) — 南岳 — 大切戸へ三、三。) — ジヤン
ダルムへ四。) — 三。) — 穂高小屋へ四、五。) — 穂高
小屋へ八。)

肩の小屋發へ二、三。) — 南岳 — 大切戸へ三、三。) — ジヤン
ダルムへ四。) — 三。) — 穂高小屋へ四、五。) — 穂高
小屋へ八。)

二十九日 晴 池ノ平(八、五。) — 穂高小屋(一
、五。) — 二。) — 奥穂高(二、二。) — 三。) — ジヤン
ダルム(四。) — 三。) — 穂高小屋(四、五。) — 五。)
一池ノ平へ六、四。)

三十日 晴タ立雷 ノビテ暮す、翌日下山。
ノ平へ五。)

◎ 岳川より奥穂高へ

杉浦亮、鷹野雄一、堀岡清

七月二十三日 晴後曇 丸西へ七。) — 岳川雪渓
二俣へ九。) — 九、三。) — 左へ入る — 滝下へ一。) — 一。
三。) — 尾根第一のコブ(一。) — 縦走路と合す
(一。) — 穂高小舎(二、一。) — 二、五。) — 本谷出合
(一。) — 丸西へ七。)

初めの予定は奥穂高と前穂高との間に直ぐ登つて
ゐる次を行くのであつたが、雪渓まで来て見ると
案外簡単そうへ滝のある所の一寸した峭壁は面白
そうである)に思はれたので左の雪渓に入る、雪
渓の切れてゐる所に可なりの滝がある、此の辺か
らコブ尾根又はロバの耳へ行くのが一番面白そう
なのだが、皆ほとんど寝不足氣味なので奥穂高へ
真直ぐに行く事にする。滝の下から右の草付で広
い尾根的なのに入り、右へ巻き気味に登つて尾根
筋に出る尾根上を少し行くと左に一本可成り大き

な尾根が見える様になり、前穂が目の前に出て来る、此の尾根には頭が三つ四つあり、之を正面に越して行かねばならなかつた。面白味を感じたのは此の辺だけで此等の頭を越して行くとやがて尾根は左からの尾根とも合してダラツとしたがらがラになる、此の辺からは霧にかすんだ奥穂の頭が見えて鐵走路まではすぐであつた。鐵走路と合しめた所は奥の頭から前穂寄りの二つ目の頭の所であつた。所は奥の頭から前穂寄りの二つ目の頭の所であつた。右へ寄り過ぎたのであって、もつと左へ行けば面白かつたかも知れなかつた。草付や造松が多く、要するに余り登り甲斐のあるコースではなかつた。涸沢の雪渓がよく滑つたので多少元を取つた様な気がした。

◎ 奥又白

移浦亮、樋岡清、上條孫人(歴)

七月二十九日 晴、嘉門次小舎(八、四五)→下又白出合(一〇、〇)→奥又白出合(一、三)→奥又白出合(一二、三)→中又白との間に一番白く見える沢出合(一、五)

奥又白本流が急に左折してゐる所へ此所から雪渓があることを前にして、向つて左の草付の中に入り、下流へ戻り気味に尾根を一本越すとチヨヤ水の沢との出合に出る、此の沢は下から見ると奥又白と中又白との間にあつて一番白く見える沢

である。入口が一寸悪いが、あとはかなりの荷があつても楽に登れる。約三時間で沢のどんつまりに来る。此処は岩が切り立つて居て到底登れそうではない。右へ細い溝状の所を通つて尾根へ出る。三時半であつた。灌木の藪をくぐると廣々とした草付の所へ出る、此処は奥又白の滝として河原へ出る、又少し藪をくぐると廣々とした所へ出る。此処は奥又白の滝の上で下から見ると三角形の雪渓のある所である。草付の所がラしくした所へ出る、此の上に池があるのが左手上に草付の岩壁があつて此の上に池があるのがラを登つてから左手の尾根へ登つたので、池池の所である。僕等は鎌くじりを嫌つて藪の切れ目まで此から距離にして二三百米上に出了ので、池は綺麗だし、薪は豊富だし、テント場として絶好の所である。

三十日 曇後雨 テント(九、三)→又白本流(一〇、三)→登りつめる(二、三)→前穂頂上(二、三)→(一、〇)→四峯と五峯との鞍部(二、三)→テント(一、五)

奥又白本流は可成急だったので足場を切らなければならなかつた。明神の大切戸よりづつと前穂寄りの尾根へ出るのであるが、此処から前穂迄の間で一寸したものであるが面白い所があつた。前穂の頂上へ着いた頃から誰のお蔭かは知らないが前

寒混じりの雨に叩かれて完全に濡れてしまつた。岩の間や雪渓の波の底大雪がたまつてゐたので歩き難くかつた。テントが浸水して居たので張り代へたが、シユラーフザツクまで濡れてしまつたには弱つた。雨なんか降らないものと決めて無難作にテントを張つた罰であらうが、ひどく撤へた。

三十一日 晴後夕立 テントへ九。〇。〇。——下又白本流へ一、二。——下又白谷を完全に越して池のある尾根に出る(二、三。) ——ヒヨウタン池へ二。〇。——嘉門次小舍へ二、四五)

下又白谷は中頃で二つに分れて居り、右の方のが(下から見て)その上で更に三つに分れてゐるが(下から見て)その上に三つに分れてゐる。此の三本の中一番左が寺島ヒノクからの尾根を間に三つ位に分れてゐるが直ぐ谷まつてゐる。一番右谷をすゝと横切つたのであるが、水の流れあるのは本流だけであった。ヒヨウタン池もテント場には絶好で、明神の岩場をやるには最上の根である。

⑥尾瀬から銀山平へ、林俊介、鷹野雄一、福岡清。

九月二十九日 沼田 — ヤ倉 — 長藏小舍
二十三日 小舍へ七、一五。——檜枝岐小舍 — 温泉 — 三條滝へ二、三。——銀山寺へ七、一五。
二十四日 銀山寺へ八、〇。——枝折峠(三、三。)
一 大温へ六。〇。
二十五日 大温 — 小出 — 東京
沼田へ朝の三時半に着いて自働車で直ぐに古仲長藏小舍には一時に着いた。長藏小舍から銀山寺まではたつぶり一日の行程、銀山寺は今年の六月から新潟縣青年講習所本舎となつたので登山客は泊めないそうである。暗くなつてから銀山寺に着いた爲めか特別に泊めて呉れたらしい。枝折峠では雲の爲めに遂に駒中の岳の大観に接する事が出来なかつた。

富士山(其の一)

未だ富士山へ行つて見ないものは話の種だ八月二十六日夜十時までに新宿のプラットフォームに集めと云ふので僕も一つ行つて見ようと云ふわけかけつけた。実際署い、定刻には近ちゃんがやつて來た。そのいでたけはと見れば何處かで拾つ

て来た様の真黒いハンチに冬の上衣だ。さぞ暑が
らう。次にベンちゃんがやつて来た。これは見送
りと云ふわけで着流しだ。何で一緒に行かないん
だと言つて見たつて始まらぬ。富士は二度行く奴
ではないさうだからね、唯吾々に恩んでくれた
チヨコレートを感謝する。次に小川が学生服でや
つて来た。約束の学生諸君はとキヨロ／＼して探
したが見當らぬ。多分敬遠されたのだらう
汽車は吉田の火祭を見に行く人と観櫻式後の休
暇で山に帰る水兵さんでギレ一杯、窓の外じやな
い。話は小川アドバイザーが居るので金儲けの話、
株の話で大月まで行つてしまつた。

此処で甲府からわざ／＼出て来てくれる丸茂を
入れと一行四人吉田までは自転車貸切、飛ぶ／＼。
吉田から専用道路とか東京では五拾円でも買手
より良いと云ふわけで馬返しまで乗つた。うるさ
く云ふのを追ひ拂つて懷中電気を頼りに上り始めた。
あなか／＼沢山小屋がある。五合目近くで大分夜も
ととい、気持ちだ。機の強い音をかきながら樹界

を下に見て雲海の上に出る大きい真赤の太陽は実
に素敵だ。そして森林帶を抜け一目さへざるも
の一つもない石原に出た時に富士もどうして馬
鹿にならんと思つた。實際馬鹿にならん。只帰り
ののつやらぼうの所を来はぬ中はだ。六合目の石
原で朝飯を食べて上り始めたが、なるほど誰から
も聞かれるが七合目の長いこといくつ小屋があ
るんだろう。漸く八合目の小屋に来ると頂上の石
の鳥居がはつきりと見える。そしてそこまでダグダ
ガッゲの道をよち／＼登つて行く姿もはつきりと
見える。最早直ぐだとほつとした。併し登り始め
るとなが／＼呼吸が苦しい。一丁も行くか行かぬ
のに直きたはあ／＼言つてしまふ。そこで考へた
コ一ナ一主義と云ふ奴を、それはダグダガッゲの曲
リ角で必ず休むことだ。即ち少し呼吸が苦しくな
んな奴では一寸登つて一寸休んで又登らうと云ふわけなんだ。こ
よささうだ。それでも十時四十分には吉田口の石
の鳥居の奴に着けた。馬返しから七時間と十分だ
った。此処で何はともあれお詣りはしなければな
らない。一錢づつお零錢を奮發して鬼に角早く金
明水でお食飯にしようと云ふので早速お宮の裏か
らだら／＼坂を下つて金明水にたどりついて大い

たはくついた。

(其の二)

(松木)

初でも我々一行は非常な呼吸困難を我慢して金明水へとたどり着いた。金明水に来る迄丸で体の中の水気と云ふものは全部汗にしてしまったから堪らない。一杯五銭の金明水で乾盃しついでに金明水をも、一杯まけ異れを見て一斤全部二杯完飯も、すぐ隣の家に這入って食事をする。隣には矢張り井戸があつて冷入り水を飲ませてもらう。も、こうなると飯なんかよんてお話にならない。

孫さんは神津牧場で牛乳をしこたま飲んで腹を痛めたやうだが富士山頂の水は決して嘗らない。

僕は合計二升近くは飲んだ様に思ふ。二合入りのコップに差當り四杯飲んだ。其の前に金明水二杯、四杯の後は土瓶ヒ一つは完全に一人で飲んだ様に思ふ。こんな水を飲んだ話をいくら書いても面白くな

これから富士山頂の最高峰御ヶ峰へと登り愈々

浅間神社奥の院に着いた。敬神の念厚い一行は先ず恭しく禮拝する(但し御神体は何んであるか誰も知らない)。神社の中は日陰でとても涼しい、お堂の中で煙草をくゆらして居ると神主がお守は如何ですかと売付けんとする、僕はうつかり手拭ひではあると云ふ。手を触れて見ると手拭ひではないが安産の帶だと云ふ、記念の「ハンカチ」はないかな!!とやつた処「まさか売店ぢやあるまいし」と神主の聲に吃驚りして気が付いた、此処は恐れ多くも神社の奥の殿中である、是れには流石の僕も二の句が次ぎなかつた。

「お守は如何です」と云ふ神主の声が僕をして何時の間にか奥院を売店にせしめてしまつて居たんである。

罪はむしろ神主にある。

ペんちゃんが居なくて助つた。居たら決つと神主と声を合せて「此処は売店ではない」と云ふとあんなに誇つたの大変なかつたが何に幸になるか分らない。

今日はとても天氣がよろしい。一回ぐるりと目を廻はせば其処とは美しい田舎寫真が展開して

来る、浅間も見えれば太平洋も見えし申分ない。
銀明水では流石に飲まなかつた。
下り一目散 七合五ヶの小屋で謙ちゃんが望郷
の念切なるものあり。曰く「早く帰つて子供の顔
が見度い」一同成程と思ふ。

御殿場で丸茂に別れ横浜で謙ちゃんが下車、品
川で小川と別れた。山からの帰りに一人／＼友達
が減つて行くのは淋しきものなり。

(近藤)

関西だより

第二回関西針葉樹會の記

時日 九月十六日～第三土曜日

場所 五十歳数馬氏宅

出席者 五十歳、渡辺、太田、高木、吉沢、
第二回以後毎月第三土曜日やる事になり今日は
その第一回目だ、會場は所帯持ちの家を順ぐりに
廻る事、食費として五拾銭を徴収する事、なるべく
令夫人の御手料理を食はせる事など色々の点に
於て関東とは趣を異にしてゐる。然し相変らず山
の話は余り出ない。赤城は支店長の更てつで遅く
なるとかがあつたが到々来なかつた。近頃は阪神
地方にもすっかり秋が訪れて六甲から西、摩耶、

高坂へかけて證明なスカイラインがクッキリと碧
空に波を打つてゐる。九郎つやエはもう一つレ
繪の方ちや大家となつたと見え、弟子へ（たゞ月謝
はどつちが出してゐるか知らないが）が二、三人
居る様になつた。

土曜日から日曜にかけて風川の奥の方へ繪を描
きに行つてゐるらしい。秋の此の附近は何處へ行
つても繪にある様な風景許りだ。太田君が日曜が
休みでない為めに皆に都合のいい様な集り方が出
来ないので困る。結局飯を食つてコンちゃんがどう
うしたの、ベン公は今頃何を考へてゐんだらう。
近頃孫さんはサカリがついたと見えて嫌に山へ登
るねなんて事を駄弁り乍ら終つて了ふのが関の山
だ。然しついでいへんだと思ふ、余り変つた事があ
ったのではお互ひに困る。誰が関西に下向するも
のがあつたら予め通知して呉れ給へ、臨時會合を
催してお江戸の新鮮な知識を満喫したいと思つて
ゐる。(熊記)

第三回関西針葉樹會

時日 十月二十一日

場所 渡辺九郎氏宅

集るもの 太田、赤城、五十歳、渡辺、吉沢の五人、
高木は近頃忙しいので不参。皆元気だから安心

してくれ。九郎ちゃんの大甲の繪は中々立派に出来てゐる。(へクマ)

第二回は用事の為欠席、今度は大腸カタルを患ひたる後で元気なし、種々の話を承つて感心してゐる。今日高木が出席しなかつたので淋しい。東京の皆様元気ですか、英國の磯野君如何ですか、ウマさんか今に山の模型を作つて売り出すかも知れん。(赤城)

話が盡きて子供の様な遊びをするのが慣例となりましたが赤城のインチキには簡単なクマは元より慎重なトンチヤンも叶ひません。(九)此の様な某りは如水會館を會場とする東京の針葉樹會では持ち得ないと思ひます。だが國立のお月見は素晴らしいでせうね。

(湯りのある トン)

霧ヶ峰

霧ヶ峰から美ヶ原と連る高原から心行くばかりアルプスの山々、はては信越国境の山々迄眺めた。こんなに混雜したのはほんとに初めてだ。席

どころか立つてゐる所もない有様だ。御連中の額はなかなか見付からない。やつと中川御大は見つけたが何と気流しじやないか。この瞬間に正直のところとしてやられたと直感した。併し彼氏は二十三、四と會社の旅行で伊香保へ行かなければならぬが途中でこの御連中はすっぽかして第二日には僕等と一緒に美ヶ原に行くとの言葉に未だやきが廻つてゐないと敬意を表した次第です。同行者は小川竹夫、曾山清太郎の二人。

上諏訪に着いたのは未だ五時近く秋の日の事藩とつま先上りの道を上るにつれて諏訪湖も段々大きくなつて来る青空も見えて来る。はては乗鞍、御岳と朝日に輝く峰が雲の彼方にくつきりと姿を表して来る。朝の気がすがくしい。道は今冬のスキーや廣げられてゐる。立派なものになるだらう。

霧ヶ峰それは全く峯と云ふよりも高原の突記だ。廣々とした草地、そして霧ヶ峰、東山の立何となるやかな高原だらう。これじやスキーも乗った様の気がすまい。スキー場にするよりゴルフリンクにした方がよいだらう。期待してゐたアルプスの連山は橋だけしか見えない。ハケ岳も見えない。

只錦糸山の異様の頂が丘と丘の間に姿を見せてゐるばかりだ。

霧ヶ峯のヒュッテから和田峠への道は全く平凡と云ふより無味乾燥の道だ。何しろ防火線の切りあけだから尾根を一直線につけられてゐるのと何處まで行つても同じ様の草地と来てゐるから寐むくつてふら／＼して歩いてゐる三人にはあき／＼してしまつた。和田峠に着いたのは丁度一時だ。思ひ出深き和田峠に着いたのだ。丁度卒業する年の別れ旅行と云ふので中川、渡辺、五十嵐と初雪の朝大屋から越したのだ。気持よく落葉松の林が煙つてゐる。そして右へも左へも万里の長城の様な切りあけが通じてゐる。凄く變つてゐるのは昨年秋に出来たと云トンネルだ。頂上を二三町も凜晴しいトンネルが突き抜けてゐるのだ。道も立派になつてゐる。最初は峠から三峯山を越して鹿ヶ峠へ出て鹿ヶ峠へ泊る予定であつたが深むいので中止して峠を北に下つて唐沢の村で今晩上つて来る中川氏を迎へることにして唐沢へ峠道を下つてしまつた。

(松木)

編輯子曰く「後半、唐沢より美ヶ原を経て、鹿
牧場迄は中川氏執筆のところ原稿間に合はず次号
陽

ト譲る」

。

。

一、次号原稿募集 原稿などなもので結構です。浦政の磯野君の最近の消息おわかりの方は句家たる方々の咲句なども是非御寄稿願ひ度いと思ひます。猶今後原稿募集は従前の様に端書き用ひる事は止めましたから左様御承知下さい。会報のカット目新しいものが欲しいと思ひます。有志の方には是非工夫して貰ひ度いと思ひます。

一、住所が変わられた方は必ず御報告下さい。

一、会費の納入の何時も問題になる事ですが、財政困難の折柄會計幹事も困りの御様子故、ひとつ針葉樹會を可愛がる意味で未納の方は此の際御奮發願ひます。

。

會員手塚晴唯君、此度都合で白木屋を辞せられ家業に従事せられる事になりました。

(小川)